



仁淀川支流・坂折川と “仁淀ブルー”



オオサンショウウオの幼生放流

横倉山南麓を、この地域の地質構造を反映してほぼ東西方向に走る清流・仁淀川の支流が「坂折川」である。かつては「桐見川」とか「遊行寺川」とも言ったようであるが、いつ頃から「坂折川」と呼ぶようになったかはわからない。いずれにしても清流で、ここのアユは格別^{さこおりがわ}に美味しいそうである。

坂折川は、中流部に昭和63（1988）年建設された治水用の桐見ダムを境にしてその下流と上流（ダム湖は除く）とではやはりずいぶん水質が異なる。すなわち、上流部では所々に仁淀川町池川近辺で典型的に見られる“仁淀ブルー”に匹敵する透き通るような水系もあり、極めて水質がいい。一方、下流部では水質は劣るが、COD値〔化学的酸素要求量〕からは“きれいな水”という範疇に入っている。

清流故に“生きた化石”であるオオサンショウウオ〔国の特別天然記念物〕が時折見つかると、仁淀川水系では最も採捕数が多い。特に、平成13（2001）年に下流部の茶ヶ柴地区で見つかった個体は、体長110㎝もあり、県下で二番目に大きいもので、現在その実物大の模型が横倉山自然の森博物館に展示されている。坂折川に一体何頭のオオサンショウウオが生息しているのかははっきりしないが、過去の日撃情報や採捕歴からすると、少なくとも数頭～十数頭はいるものと思われる。尤も、桐見ダムによりその生息域は完全に分断されており、相互間の行き来は

ない。興味があるのは、坂折川の上流には、定住していると思われる巣穴があることと、かつて体長26㎝のエラを持った幼生が見つかったが、平成27（2015）年2月4日に孵化して間もない体長5㎝ほどの離散幼生16体が見つかり、四国では初めての繁殖が確認されたことである。

オオサンショウウオは、坂折川の上流部共に見られるが、上流部での採捕例が多い。平成27年に見つかった幼生16体すべてが高知市のわんぱーくこうちアニマルランドで飼育されていたが、体調25㎝位に大きくなった3匹の幼生にマイクロチップを入れて、昨年11月22日に元の坂折川上流に放流された。

初めて巣穴から離散した幼生を確認した時の感激も忘れられないが、すっかり大きくなってたくましく育った幼生が生まれ故郷の川に帰っていく姿もまた感慨深かった。無事大きくなって成体になり、次の世代へ受け継いでいって欲しいものである。

坂折川の上流部には広葉樹がよく残っていて、春の新緑、ヤマザクラ、秋の紅葉が美しい。また、川岸の岩場には、牧野富太郎博士の発見・命名による薄紫色の「キシツツジ」が所々に自生し、正に景観に花を添えている。キシツツジは、横倉山自然の森博物館の1階と2階の屋上に植栽として植えられていて、春には一面に花が咲き誇り、季節感が味わえる。



“耳なし芳一”のモデル 「先達野の耳なし地蔵」

安井 敏夫

越知町に古くから伝わる伝説に、小泉八雲（本名：ラフカディオ・ハーン）の『耳なし芳一の話』のモデルともいべき、『先達野の耳なし地蔵』と呼ばれる琵琶法師^{せんだちの}にまつわる話がある。『先達野の耳なし地蔵』は、横倉神社から国道33号を松山方面に約350[㍎]進んだ所の越知橋西詰めのおく北側（約15[㍎]）を仁淀川の河原に至る道路沿いにある。「耳なし地蔵」入口にある看板には次のように記されている。

今から400年ばかり昔、横倉神社の南隣りにあった横倉寺に城了^{じょうりょう}という身寄りのない琵琶法師がたずねて来た。横倉寺の住職仙英は城了を寺に住まわせて、仏様の前で琵琶を弾かせ供養としていた。

ところが、城了が夜中に平家の亡霊に連れ出され横倉山上の安徳天皇の御前で平家琵琶を語り帰って来る事を知り、このままでは城了が危ないと思ひ、祈禱をした香水を城了の身に塗って亡霊の手から逃れさせようとしたが、香水を耳に塗り残したため、亡霊に城了の耳だけ見つかり、耳をちぎって持って行かれた。

城了の死後、寺僧は城了の墓の上に耳のない地蔵を祀り供養した。

その後この地蔵に願いごとをするとよく叶うという評判で、願いが叶うとお礼に“穴あき石”を供えるとよいといわれ、たくさんの穴あき石が供えられている〔写真〕。

小泉八雲（1850-1904）の『耳なし芳一の話』は、江戸時代の天明2（1782）年に出版された『臥遊奇談』という書物にある「琵琶秘曲泣幽霊」という話のが原典になったと言われており、日本の怪談話を英語でまとめた小説・怪奇文学作品集



『KWAIDAN』（怪談）〔1904年出版〕に「THE STORY OF MIMI-NASHI-HŌICHI」として紹介されている。ストーリーの舞台



は、源平の下関（旧赤間関）「壇ノ浦の戦い」で敗れた平家一門の供養のために壇ノ浦を望む海辺の高台に建てられた阿弥陀寺という寺のすぐ目の前の境内の墓地である。そこには、「安徳天皇御陵」（宮内庁指定）を始め平知盛ら「平家七盛塚」や戦いに敗れた平家の武将たちの墓がある。ちなみに、阿弥陀寺は現在は赤間神宮という神社となっている。

「耳なし地蔵」の話は、平家哀話にまつわる伝

説で、小泉八雲の“耳なし芳一”が類似の話として最も有名であり、昭和40（1965）年に映画化されている〔写真〕。その原点は各地にあるが、「安徳天皇潜幸伝説」の残る越知町には、小泉八雲よりもさらに古い400年以上の昔から、越知の話として伝えられたもので



平家七盛塚

ある。それは、藩政時代の佐川深尾家の家臣の国学者らから聞かされた昔話を、後の明治維新に深尾遺臣の国学者・伊藤乗興が書き残したという『耳なし地蔵の由来』である。

その内容（原文のまま）は、次のとおりである。

横倉字の住僧仙英は佐川乗台寺快英の徒弟にして学徳兼備の聞え高く且つ能く頭幽の理に通じて前世未来を通観し世に奇特の事多し。其の頃予州松山方面より城了と云える琵琶法師一人琵琶を背負いて遙遠たどり来る。元来琵琶は仏道にては法楽と云いて仏前にて之を演奏し仏意を慰むるの具なれば、彼の住僧仙英これを横倉寺に留めて宿らしめ、折々には一曲を演ぜしめて仏意を慰め且は自らの楽しみとなせり。然るにこの琵琶法師夜半より忽ち所在を失し



て見えず、暁に至れば又歸りて元の所にあり夜毎に此

の如し。寺中の衆僧皆これを怪しむ。一日一役僧城了に向いてこの事を詰り問う。城了曰く、夜中の事はさる方より一切他言を禁せらるゝと雖も外ならぬ厄介を蒙る当時の事なれば止むを得ずあらしを物語るべし。夜毎子の下刻に至れば宮人と覚しき（思しき？）方おわして、主人に当る御方其の方の琵琶をきこし召されたきにつき、大儀ながら我に従いて来られたしとて伴はれて、某所貴人の館とおぼしくて殿内広大にして幾間となく、長く廊下を経て奥殿に至り西北向の室に伴はるれば官女らしき一人出て来りて、此の座敷の正面にお上（御上）のおはすれば此の方に向いて一曲を奏すべし。謹んで源氏にかかる一言も発すべからず、お上（御上）のお耳障りとなる故よく気をつけられたしと注意せられてさて無事に一曲を終る。お上（御上）にもいと御慰の御様子にていろいろと御もてなしに預って暇を賜はり、はじめの男に伴はれて暁方お寺に歸れり。

其の後毎夜必ず召に応ず。時にはお好みなりとて二三曲まで奏する事もあり、歸るさ（さい？）に彼の宮人にこの御殿のある所は何処なりやと尋ぬれば、こゝは鞠が奈路^{※2}と称する処なりと言えりと語る。役僧之を主僧仙英に語る、仙英首を傾けて曰く、これは安徳天皇幽宮なり。これに召さるゝは光榮なることなりと雖も、かく度々幽界に出入りしては城了は遂に幽界の人となるべく、未だ人世に在る間は一先ず幽冥界とは遮断せざるべからずとて稍暫らく仏前に向って祈念を込め、さて城了を呼んで君半ば既に幽界に入れりと雖今世の縁いまだ尽きざれば、我れ君がために冥界との縁を絶つべしとて加持の香水を以て城了が身体残らずこれを塗れり。

さて翌朝に至りてこれを見れば城了は恙なく元の所にあれど、左右の耳朶は根元より千切れて無かりけり。これ香水の力にて全身は隠れて見えざりしかども、両の耳朶迄香水の行き足らざりし故これのみ顕れ居りて遂に難を受けしにてぞありける。



さて城了は、滞りて数年の後終に横倉寺にてみまかりしかば、これを寺の北方先達野に葬り菩提の為にその墓の上に地蔵を安じ且つ紀念

（祈念？）の為とてその石像の両耳を除きたり。これ先達野耳無地蔵の由来なりとなん語り伝えたる。

（『越知町史』より）

これからわかるように、越知に伝わる「先達野の耳なし地蔵」の話〔写真・イラスト〕と小泉八雲の「耳なし芳一の話」は、ストーリーとしては全くといっていいほどよく似ている。違う所といえば、“耳なし芳一”では、怨霊にはお経が書かれている身体部分は透明に映り視認できないことから、芳一の体全体に隅々まで墨で般若心経を書いたが、“耳なし地蔵”では、盲目の琵琶法師・城了の体に“香水”^{※3}を塗ったことである。さらに、琵琶法師が真夜中に連れ出され、高貴な御方（安徳天皇）にお話し（『平家物語』など）を聞かせる場面が、“耳なし芳一”では、自分の住んでいる寺境内の安徳天皇の墓前であるのに対し、“耳なし地蔵”では、寺の遥か上方にある鬱蒼とした横倉山中の現安徳天皇陵墓参考地であることである。視覚・映像的には“耳なし芳一”の話の方がいかにも怪奇であるが、場面設定としては“耳なし地蔵”の方が面白いといえるのかもしれない。



小泉八雲の『耳なし芳一の話』が、八雲が松山に來遊した際、越知に伝わる琵琶法師・城了にまつわる『先達野の耳なし地蔵』の由来の話を聞いて、それを基に書いた^{※4}のものであるとも言われており、いっそう興味深いものがある。

- ※1 平安時代から存在した、琵琶を弾き語り経文誦した放浪の盲僧。
- ※2 「鞠が奈路」（「鞠ヶ奈呂」）は、現在「安徳天皇陵墓参考地」のある場所をいい、地元では「鞠ヶ奈呂陵墓参考地」と呼んでいる。安徳天皇の「行在所跡」は、これよりもさらに下った、本宮（横倉宮）と中の宮（杉原神社）の間にある小丘陵地にあり、古く江戸時代から「鞠の場」と呼ばれていたようである。いづれにしても、安徳天皇が従臣たちと蹴鞠をした場所と考えられている。
- ※3 この頃の“香水”は、西洋からもたらされた現在のようイメージのものではなく、清浄水（關加水）に香や花を入れて作った神仏に供える水または身体や種々のものを清めるために加持祈祷した水をさす。これらを仏教用語で「香水」と呼ぶ。“耳なし地蔵”の話では、「香水を塗った」とされているが、香水で経文を書いたことも考えられる。
- ※4 明治30年代に愛媛の松山に來遊した際、妻の小泉節子に読ませた（八雲は日本語がさほど得意ではなかった）ものを筆したものとされている。（『越知町史』）

〔註〕P. 2の掲載写真は、映画『耳なし芳一の話』の一場面。



ニホンカワウソ
(須崎市新庄川)

ニホンカワウソ

安井 敏夫

2017年2月、安徳天皇墓参考地「佐須陵墓参考地」*1のある、日本海に浮かぶ長崎県・対馬で、国内では38年ぶりに生きた野生のカワウソが確認され大反響を呼んだ。琉球大動物生態学研究室が設置した赤外線カメラで撮影されたもので、すでに絶滅したとされていたニホンカワウソかとの期待が寄せられた。その後の環境省の調査で、採取した糞から朝鮮半島や中国北部に棲むユーラシアカワウソのDNAが検出され、韓国のカワウソが漂流物に乗って対馬へ渡り住み着いた可能性が高いという見解で、ニホンカワウソである可能性はほぼ否定された。

カワウソは、ラッコなどと同じイタチ科の哺乳類で、オーストラリア・南極以外の全世界に分布し、一番小さな種類のコツメカワウソから、一番分布域の広いユーラシアカワウソまで、その種類は約11種に及ぶ。四肢は短い尾は長く、指の間には水かきがあり、主に沿岸域や汽水域ならびに河川の下流から上流域、湖沼などの水中及び水辺に生息し、魚・貝・カニなどの甲殻類をエサとする。ニホンカワウソは、日本固有のカワウソで、国の特別天然記念物に指定されている。昭和2(1927)年頃までは、沖縄を除く全国各地に生息していたが、1945年の愛媛県内での死体発見以降の確認はすべて四国内に限られるまでに至った。生きた個体が確認されたのは、昭和54(1979)年の高知県須崎市の新庄川で泳ぎながら餌を漁るカワウソの姿で、この映像が最後となった。新庄川では、昭和61(1986)年にニホンカワウソの死体が発見されているが、これ以降は、生息及び死体等の確認はない。生息の可能性を伺わせるような痕跡が全くなかったわけではないが、生息を裏付ける決定的な生体の映像が確認されなかつ

たため、平成24(2012)年、環境省により絶滅種に指定された。

ニホンカワウソの“絶滅”に関しては、異論を唱える研究者もいる。その一つが、平成21(2009)年に高知県内であった有力な目撃情報で、それを基に描かれたスケッチがニホンカワウソの特徴をよく備えているとし、少なくともその当時までは県内に生息していたとしている。

現在高知県内には、県西部の施設を中心に計14体のニホンカワウソの標本が保管されている。このうちの昭和52(1977)年の大月町産の剥製〔写真〕について、東京農業大学が遺伝子解析を行った結果、大陸のユーラシアカワウソとは異なるDNAを有し、「日本固有種」であることがわかった。しかも、それは、ユーラシアカワウソとは約127万年も前に系統樹から枝分かれした古い種であることもわかった。今回対馬で見つかったカワウソのDNAは、大月町産のカワウソ(ニホンカワウソ)のそれとは異なっていることから、ニホンカワウソではないということが立証された。ちなみに、江戸時代の文政6(1823)年にオランダ商館医官として来日したドイツの医者・博物学者であるシーボルトが、離日する6年間に収集した日本の逸品約25,000点の中にもニホンカワウソの剥製が含まれており、時代からしてニホンカワウソであると考えられる。

ちなみに、ニホンカワウソは愛媛県の県獣に指定(昭和39年)されていて、愛媛県総合科学博物館に、剥製を主に実に34点ものカワウソの標本(剥製:28点、骨格:2点、頭骨:2点、毛皮:1点、死体:1点)が保管されている。その他とべ動物園にも剥製、骨格が各1点ずつ所蔵されているという。

カワウソの祖先の歴史は、今から約1800万年前〔新生代新第三紀中新世前期〕まで遡るが、昨年二件の重要なカワ



ニホンカワウソ(1979年/須崎市新庄川)
撮影者:鍋島昭一氏

ウソの化石の発見があった。一つは、メキシコ中央部の砂漠で見つかった約600万年前のカワウソの歯の化石で、もう一つは、中国南西部の雲南省で見つかった約660万年前の現代のカワウソの2倍ほどの大きさの、“カワウソの祖先”とみられるものの頭蓋骨と上顎の化石である。日本では、静岡県浜松市内の堅穴からニホンカワウソの化石が発見されている。従って、カワウソは、越知町の坂折川で繁殖しているオオサンショウウオ〔国の特別天然記念物〕と同じ“生きた化石”ということになる。

ここで問題なのは、四国のオオサンショウウオが、本州からの持ち込みではないかという説^{※2}も一時期あったように、日本固有種なのか否かということである。これに関しては、すでに述べたように、高知県大月町産の個体のように、日本列島と大陸が陸続きであった頃

〔第四紀更新世〕に陸橋を渡って日本列島に侵入し、その後日本で独自の進化を遂げた系統の子孫であり、日本固有種と考えられるものがあるということである。この点、大月町産の標本は学術的に貴重であるということが言える。実際、1915年に神奈川県城ヶ島で捕獲され、その後毛皮にされたカワウソが、DNA 鑑定の結果遺伝的に大陸のユーラシアカワウソと同種のもので、“遠洋漁業で大陸の港に寄港した際積み込まれた個体が日本で野生化しその後捕獲された”という大陸からの人為的な持ち込みの可能性のある事例もある。このようなことを考え

ると、県内に存在する残り13体の標本についてもDNA 鑑定を行って、純粋なニホンカワウソか否かを解析する必要があると思われる。

かつて、越知町内でもカワウソの目撃例があり、昭和13～14年頃、旧松山街道の“三ツ尾の渡し”下流付近の淵で川に飛び込むカワウソの親子の姿を見かけたという住民の証言もある。おそらく、坂折川（下流部）や柴尾から黒岩（佐川）にかけての柳瀬川にもかつてはカワウソが生息していたのではないと思われる。



大月町産のニホンカワウソの剥製（のいち動物公園所蔵）

カワウソの個体数が激減し絶滅（？）した原因としては、古くは、毛皮の防水・防寒性から日露戦争（明治37～38年）で軍服として使用されるなど、保温性に優れた毛皮を目的とした乱獲と、河川の護岸工事などによる水辺環境の破壊、家庭排水などによる水質汚染による餌動物の減少などが考えられる。日本では、履物や寝床の敷物に用いたほか、明治中期に登場し、大正～昭和初期にかけて流行した男性の和服用の防寒コートとして用いられたインバネス（“とんび”）の襟にカワウソの毛皮が使われたし、古いアユ猟の中に、長い竹の棒の先にカワウソの毛皮を付けて水中のアユを追って網に導く漁法があるなど、カワウソの毛皮が重宝された時期があった。

カワウソのあの愛らしい姿は、本当にもう二度と見る事ができないのであろうか？絶滅に瀕している動物は、何もカワウソだけではない。四国のツキノワグマが絶滅するのものはや時間の問題という生息数まで来ている。地球上の生態系の頂点にあり、最高の支配者である我々人間は、これら生態系を支えるすべての生き物が絶滅しないよう、トキのような過去の苦い教訓を真剣に受け止め守っていく必要がある。



ニホンカワウソ（1979年／須崎市新庄川）
写真提供：高知新聞社

- ※1 しもあがたぐんいづはらまき 長崎県下 県 郡 巖原町宮久根田舎。
- ※2 愛媛県肱川町の敷水洞穴から約1万8000年前のオオサンショウウオの化石が見つかっており、少なくとも四国には固有のオオサンショウウオがいたことになる。

★本原稿の大部分は、『広報 おち』(No.560)の「博物館だより No.154」(2018)でも取り上げた。

(やすい としお／横倉山自然の森博物館 学芸員)

博物館行事

開館20周年企画展：

高橋宣之写真映像展

『古き神々の森 ～横倉山～』

2017年9月23日（土・祝）～

11月26日（日）

横倉山自然の森博物館は、昨年10月11日で、開館20周年を迎えた。その節目に当たり、越知町のシンボルである「横倉山」をテーマにした企画展を開催した。

横倉山は、約4億5000万年前の日本最古の化石を産する山で、かつては赤道付近のオーストラリア大陸の傍らにあった

と言われていて、日本列島のみならず地球の歴史を考える上で重要な山である。また、世界的な植物学者・牧野富太郎博士縁の希少植物を含む植物の宝庫で、推定樹齢数百年のアカガシの巨木・古木から成る日本唯一の“アカガシ原生林”が残り、森中が神秘とロマンに包まれている。さらに、その神秘的な山容から、800年以上も昔から、土佐国唯一の修験道の霊場（道場）として栄え、安徳天皇潜幸伝説も残る。このような古い歴史を有する横倉山は、正に“不思議の森”というにふさわしい原始の森である。

本企画展では、この横倉山にスポットを当て、“仁淀ブルー”

で有名になった清流・仁淀川をも含め、写真と映像でその魅力を紹介する。



企画展開催期間中、本人による3回の「展示解説」を行い、作品及び写真撮影に関する生の意見・感想を聞いた。

主な感想として、「美しかった」「すばらしい」「感動した」が圧倒的に多かった。その他、「とても素晴らしく感動的な写真と映像を見せて頂き有難うございました」「自然の美しさに改めて驚きと感動を得ました」「一つ一つの作品に物語があって感動しました」「“仁淀ブルー”の美しさ、高知のすばらしさを再認識しました」などの感想があった。



横倉山ミニ歳時記

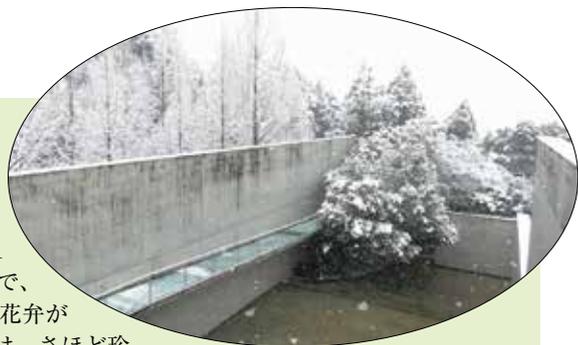
■博物館の雪化粧

今年の2月12日、高知市内でも朝起きると2センチほどの冠雪があった。1センチ以上の積雪は11年振りのようだ。ここ越知町でも北山の山肌は真っ白で、上空の空も雪曇りで全く見えなかった。10時頃からは博物館の周りでも花弁が舞い落ちるように雪が降り始めた。横倉山や北部の山々が雪化粧するのは、さほど珍しくもないが、平地に積もるほどの雪は珍しく、高知市内では十年に一度あるかないかといったものである。たまに雪が降り積もり、一面白銀の世界になるのも、ここ南国では風情があっていいものである。

時間とともに博物館進入路脇のメタセコイアの並木もすっかり綿のような雪で覆われ、スロープも白いじゅうたんを敷いたように雪の帯ができた。水庭に舞い落ちる雪は、降っては消え、降っては消え、まるで水の下にある別世界に吸い込まれていくかのようなようであった。

昨年の夏は“スーパー猛暑”といわれるほどの厳しい暑さであったが、それに続く冬もまた、昭和56（1981）年に東北地方～北近畿を襲った豪雪（“五六豪雪”）に次ぐ大寒波・大雪で極寒となってしまった。

「地球温暖化」と叫ばれている中、“氷河時代”ともいうべき大寒波が世界的に襲来し、相反する現象が同時にやってきたような昨年から今年にかけての気象であった。



友の会だより

秋の視察研修：「備中松山城と屋島源平の戦い史跡」

2017年11月11日(土)～12日(日)〔参加者：13名(内事務局2名)〕

〔11日(土)〕備中松山城、高梁市商家資料館(池上邸)、倉敷市自然史博物館。

「備中松山城」は、NHK大河ドラマ『真田丸』のオープニング映像として使用された城で、全国にある12の天守が残る城の一つである。本城は、その中でも最も高い場所(標高約430m)に築城された最も古い中世の山城で、“日本三大山城”の一つでもある。以前友の会の視察研修で訪れた“天空の城”竹田城(兵庫県)が石垣のみであったのに対し、ここは極めて珍しい江戸に時代以前の天守閣が現存する、第二の“天空の城”である。

〔12日(日)〕安徳天皇社、屋島宝物資料館、四国民家博物館(四国村)、高松平家物語資料館



安徳天皇社遠景(背後は屋島)

「安徳天皇社」は、一の谷の戦いに敗れて西方に逃れた平家一門が屋島に逃れ陣営を造った地の安徳天皇の行宮(行在所)のあった所といわれている神社である。源平の古戦場として知られる屋島の東山麓の緩やかに傾斜した見晴らしの良い田園地にひっそりと佇んでいる。神社の敷



安徳天皇社

地は、東西約22km、南北約35kmで、本殿裏の北西隅には、寿永4(1185)年にこの地で繰り広げられた源平屋島の合戦で討ち死にした平家の武将たちの墓(五輪塔など)を一か所にまとめた「三界萬霊供養塔」がある。

「高松平家物語資料館」は、平家一門の栄枯盛衰を描いた『平家物語』の中の有名なシーンを約310体の蠟人形で生々しく再現した日本最大級の蠟人形館である。

「四国民家博物館」(“四国村”)は、四国各地から移築復元した古民家や歴史的建造物33棟を展示した野外博物館で、その一角に横倉山自然の森博物館と同じ安藤忠雄の設計した「四国村ギャラリー」(2002年新設)がある。“四国村”創設者の加藤達雄が収集した美術品を展示する美術館で、屋島南麓斜面という立地を生かして設計された“水景庭園”を特徴とする。



備中松山城

「3階展望ロビーにおけるコーヒーの無料サービス」

2017年11月22日(水)・24日(金)、12月19日(火)～20日(水)

10月11日(水)～13日(金)の無料サービスに次ぐ第2、3弾。友の会会員による“おもてなし”で、お客様に、眺望のいい空間でくつろいでもらうことができた。

「炭焼き体験」

2017年12月16日(土)

焼き上がった炭・作品を取り出した後、新たな薪を入れ、18日(月)に火入れを行った。

「2018年の初日の出を横倉山で」

2018年1月1日(日・祝)〔参加者：10名(内事務局3名)〕
毎年恒例の、遙か南に太平洋を望む畝傍山眺望所から、

平成30年の初日の出を拝む。最初のうちは水平線に雲があったが、しばらくして東の越知市街地方面の雲の上から昇ってくるオレンジ色の太陽が望めた。



【博物館日誌（抄）・平成30年度博物館行事予定】

- 平成29年9月23日（土・祝）～11月26日（日）
開館20周年記念企画展：
高橋宣之写真映像展『古き神々の森～横倉山～』
- 平成30年3月27日（火）
博物館協議会
- 4月7日（土）～6月10日（日）
春季企画展：中西安男写真展
『追われゆく命～知られざる野生動物の世界～』
- 6月16日（土）～30日（土）
選抜移動展：写真展『土佐』
- 7月21日（土）～9月9日（日）
夏休み企画展：『ほねほね カーニバル』（仮称）
- 8月11日（土・祝）
夏休み博物館教室〔工作〕：『オリジナル万華鏡作り』
- 8月18日（土）
夏休み工作教室：『勾玉作り』
- 9月22日（土）～11月25日（日）（予定）
秋季企画展：『骨の造形美』（仮称）
- 12月
冬季企画展（未定）

- 11月11日（土）～12日（日）〔一泊二日〕
「備中松山城と尾島源平の戦い史跡」視察研修
- 11月22日（水）・24日（金）
3階展望ロビーにおけるコーヒーの無料サービス
- 12月19日（火）～20日（水）
同上
- 平成30年1月1日（月）
初日の出を横倉山で
- 4月15日（日）（予定）
《土佐の投入堂》聖神社見学とアケボノツツジ観察会
- 5月
友の会運営委員会
友の会総会
- 6月2日（土）
『仁淀川水質調査』
- 6月下旬
横倉山ヒメボタル観察会
- 10月（予定）
杉原神社旧表参道を歩く
- 11月10日（土）～11日（日）〔一泊二日〕（予定）
視察研修（候補地案）
 - ①松江城〔国宝〕・小泉八雲旧邸・小泉八雲記念館
城下町（武家屋敷など）・メテオプラザ（美保関隕石）
 - ②一乗谷遺跡・福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
光の教会（安藤建築：大阪府茨木市）
 - ③比叡山延暦寺・修学院離宮

【博物館友の会「フォレストクラブ」・平成30年度活動予定】

- 平成29年10月11日（水）～13日（金）
3階展望ロビーにおけるコーヒーの無料サービス

《お知らせ》

『昆虫コーナー』新設

昨年末に、1階の「植物コーナー」と「歴史コーナー」の一角に、『昆虫コーナー』を新設した。

以前寄贈いただいた高知市の故・大津修氏のコレクション（蝶標本）に昆虫研究家・海地節雄氏の指導により、氏のコレクションを加えた国内外の蝶・甲虫類の標本から成る。高知県産の国蝶・オオムラサキ、“森の宝石”と呼ばれる美しいキリシマミドリシジミ、3年前横倉山

では初めて確認されたヒサマツミドリシジミなどのシジミチョウ科の蝶類の他、外国のモルフォチョウ・トリバナアゲハなどのカラフルな美しい蝶類、子供たちに人気の高いヘルクレスオオカブト・ネプチューンオオカブト・コーカサスオオカブトなどのカブトムシやクワガタ類などを幅広く（ドイツ箱：27箱）展示しており、目下県内では最も充実した昆虫コーナーである。

- ★4月28日（土）～5月6日（日）のゴールデンウィーク期間中は休館日なし
- ★10月11日（木）は、博物館開館記念日（無料開館）

高知県越知町立



THE YOKOGURAYAMA
NATURAL FOREST
MUSEUM, Ochi

横倉山 自然の森博物館

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
<http://www.town.ochi.kochi.jp/>

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円（※各20名以上）
高校・大学生……………400円（上の団体は）
小・中学生……………200円（100円引き）
- 越知への交通
高知——JR特急 約30分——佐川——バス 約15分——越知
JR普通 約50分

